

2019年1月国際放送番組審議会

2019年1月のNHK国際放送番組審議会（第654回）は15日（火）NHK放送センターで8人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「NHK NEWSLINE : Influential INDIA」、「The Pianist from Syria」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告資料を配付し、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	大西 洋	(日本空港ビルデング(株) 取締役副社長執行役員)
副委員長	神馬 征峰	(東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学 副理事、大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(カルビー(株) 上級執行役員、事業開発本部本部長)
委員	木山 啓子	(特定非営利活動法人 ジェン 理事・事務局長)
委員	塩見美喜子	(東京大学大学院理学系研究科 教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)

(主な発言)

< NHK NEWSLINE 「Influential INDIA」

(NEW DELHI 12月5日(水)、 MUMBAI 12月6日(木)、
KOLKATA 12月7日(金) 各13:00ほか) について>

○ 情報が多く、いろいろなことを知ることができた。同時に、番組の目指していることが日本との関わりを伝えたいのか、インドについて伝えたいのかが少しわかりづらいと思った。日本とインドの関わりはもっとたくさんあるだろうし、この3回だけではとても描き尽くせないと思う。もっと深いところがあるはずだと思う気持ちが残ってしまった。

○ タイトルの「Influential INDIA」（影響力を及ぼすインド）を一見すると、インドが海外に対してどのような影響力を持っているのかを伝えるイメージだったので、インド文化を海外にどんどん輸出する番組なのかと思った。「Influential」という言葉が適切だったのかどうか気になった。

また3つエピソードがあり、1つ目は「NEW DELHI」で、ITで変わる社会を描いている。2つ目が「MUMBAI」で映画と社会。この2つは非常に野心的な取り

組みだった。特に2つ目のエピソードでインドの衛生問題、教育問題を取り上げたのは、非常によかった。女性の社会進出を取り上げた点も評価に値すると感じた。だが、3つ目の「KOLKATA」のエピソードは、日本とインドのつながりを強調しているが、断片的な印象がぬぐい切れなかった。1つ目と2つ目とは異なり、3つ目は全体のストーリー性に欠けたのではないか。このシリーズの目的が全体的にわかりづらくなっているのではと感じた。

- 3本続けてシリーズとして見たときに、そのシリーズ全体の意図は何なのだろうかと思った。まず日本との接点を伝えたいのか、日本国内のインド人コミュニティを紹介することが目的なのか、あるいはインド人に見てもらいよりも非インド人向けに重心が置かれているのか、わかりづらかった。

また、そういう印象を与えるのは、この「Influential INDIA」というタイトルが内容とどう結び付くのがよくわからない。“How the country transforming”にたぶん一番言及しているのは3つ目の最後にニューデリー支局長が、地域や国際社会におけるインドの話をしているところくらいであり、最初に大上段に構えたシリーズの意図がこの番組個々のところに表れていないし、うまくつながっていないのではないか。

その3つ目も、途中までの内容と最後に総括者として出てくる支局長の話が次元の違う話になっており、非常にちぐはぐな印象を与えてしまい残念だ。

また、1つ目について、インドが近くイギリスを抜いて世界第5位の経済大国になると説明するくだりがあったが、イギリスを引き合いに出すのであれば、旧植民地が旧宗主国を追い抜く点を指摘してもよかったのではないか。

個々の内容については非常に興味深かったが、全体の流れがいまひとつよくわからなかった。

- 大変興味深く見たが、タイトルがなぜ“Influential”なのか疑問に感じた。インド国内の視聴者や日本在住のインド人コミュニティに届けるために制作したとのことだが、そうであるならばもう少し違った視点になる気がした。むしろこれはインドのことをよく知らない日本人にとって非常に興味深い内容だと感じた。

“Influential”ならば、インドが経済大国になっていることや、南アジア全体の中で盟主的な役割を担っていることなど、誰にとって“Influential”なのかを明確にできるとよかった。むしろ、今回、ナレーションの中にも出てきたように“transforming India”とか、“amazing India”など、もう少し違った形容詞も考えられたのではないかと思う。

1つ目は「NEW DELHI」と銘打ちながら、途中からラジャスタンになり、その後はチェンナイのIT企業が取り上げられていて、必ずしもニューデリーに焦点をあてていなかった。デリーに近接した都市にグルグラムがあり、ここはかつて日本の自動車メーカーが進出して何もなかったところから工業都市になった都市で、今はITの一大ハブとしても成長している。「NEW DELHI」と銘打つならば、チェンナイでなく、グルグラムを取り上げていればタイトルとの整合性はとれたと思う。

それから、アプリを使った商業活動を取り上げていたが、農業地帯においても、例えば村々にITキオスクができて、文字の読めない人たちもその村に1台置かれたパ

ソコンを使って作物の病害についての知識を得たり、市場価格を知って貧困層の生活向上につながっていたり、あるいは農村地域の学校でもパソコンが設置されて、貧困削減に貢献したりしているの、もう少し幅広い取材も可能だったのではないかな。

2つ目の「MUMBAI」の映画の話の中で、非常に注目されており現在日本でも上映されている映画が取り上げられたことは大変興味深い。インドの Bollywood 映画は南アジア全体で視聴されていて、バングラデシュやパキスタンでも非常に人気だ。それでこそ “Influential” などところもある。特に娯楽が少ない農村地域では映画が唯一の娯楽で、人々の価値観への影響力が大きいことも指摘するとよかった。

インド人にとっては3つ目の「KOLKATA」で、日本とインドの間に様々な交流があることを知ることができて興味深い内容だったと思う。だが、少しバラバラな感じがした。例えば歴史的にもインドと日本は非常に友好的であるとか、ストーリー性をもう少し持った形で取り上げるとよかったと思う。

- インドのことはほとんど知らないの、興味深く見た。

「NEW DELHI」を見て驚いた。中国では今、現金を使わず、普通の人々もリンゴを買うのに青果店でスマートフォンで支払うと聞いていたが、インドでもその割合が増えてきているとのことだ。

ただ、遠隔地治療を支援する医療アプリに関して思うのは、遠いから、お金がなくて病院に行くことができない人たちにとっては確かにありがたいことだろうが、医療は1対1で直接会って行うものだ。このアプリだけで満足しないほうがいいという注意も入れた方がよいのではないかなと思った。

「MUMBAI」に関しては、映画がかなり “Influential” だと知って驚いた。女性の生理用品を普及させる媒体が、映画であって、なぜテレビではなかったのだろうかという疑問を持った。

「KOLKATA」に関しては、ひとつひとつのエピソードはおもしろかったが、ほかの2つに比べてストーリー性が少なかった。

- インドへ行ったことがない人間にとっては、とてもおもしろい番組だ。特に最初の2つ、「NEW DELHI」と「MUMBAI」についてはとても興味深く視聴した。

日本人が見ていい勉強になる番組だったように思う。特に最初の「NEW DELHI」については、医療から農作物、教育など、広い角度で、インドの市井の人から、日本のオフィスに至るまで取材していて、非常に刺激的でもあった。

次の「MUMBAI」では昔ながらの光景とITが共存していて、映画と女性の衛生に関することから社会進出の支援まで、幅広い話題が取り上げられていた。

この2つに比べると3つ目のエピソードはよくわからず、文化や歴史などいろいろな部分も深掘りしていくと、たぶん18分では足りないだろう。難しいテーマに取り組んでしまったがゆえに、少し内容が薄くなったように感じた。

しかし日本においてインドに関する情報量は少ないのが現状だ。日本からインドに行く観光客も少ないことを考えると、国際放送だけではなく1つ目、2つ目は国内で放送しても活用できるのではないかな。

- 貧困下にある人に対して “Influential” な番組ではないだろうか。例えば今、アフ

リカのウガンダで生理用品の研究をしたいと言う学生もいる。だから「MUMBAI」で紹介された映画は、アフリカの途上国の人々にとって“Influential”な内容が含まれていると感じた。

インドではすでにカースト制は法律で禁止されていると思うが、いまだに不平等がはびこっている。それがITによって平等な社会に移ろうとしているのが、この最初の番組の中心的な話題であったと思う。だが、平等な社会になったらインドはどうなってしまうのか。平等な社会に向かうことによって新たな不平等が生まれるような気がする。現状の不平等な社会の中で、インドでは貧しい人が何とか生き残ろうとしている知恵を働かせている。貧困下における知恵みたいなものが、今回の番組では少ないような気がして、平等な社会にまっすぐ進んでいることがすばらしいと言っている印象を受けた。

放送したタイミングについて伺いたい。このキャラバンシリーズの番組を今やる必要性、強み、そういうものがあるのか。

- この番組を制作する際にどれぐらい、日本出身者の目を意識しなければならないのか。この特集がインドでのNHKワールド JAPANの認知度アップを図るためのものならば、インドの人たちにとって興味深いものになるほうがいいと思う。もちろんNHKの国際放送なので日本とのつながりがあるのはおかしいことではないが、そこにインドの人々は本当に興味を持っているのか。そうでないならば、本当にインド人の視点で作ったほうが目的にかなっているのではないかと思った。
- IT分野で“Influential”なインドといえば、やはりシリコンバレーに相当な数のインド人が入っていったことこそがグローバルな意味で“Influential”だったと思う。もちろんシリコンバレーに行って戻って来た若い人たちが番組に出てはいたが、いまのシリコンバレーや、世界のIT革命にインドが貢献してきたことを示すストーリーのほうがよかったのではないか。

(NHK側) インドでNHKワールド JAPANの認知度を高めるのが大きな目的の1つだった。ニュース番組なので、インドの今の課題を取り上げて世界に発信していくことももう1つの目的だ。

最初は7月にインドに行って、現地の観光協会の職員の方などと話して、インド人にどういった内容が関心をもってもらえるのかを聞き取り調査した。そこで出てきたテーマが「映画」だ。映画は娯楽として非常に普及していて、テレビ番組の中でも映画番組の人気の高いようだ。また、われわれは日本の放送局なので日本とインドの関係を探ろうと思った。

また「インドといえばIT」とは誰もが認めるところだ。農村の中でのITについて指摘があったが、デジタルビレッジの取り組みを1回目の冒頭で少しだけ取り上げている。それはまさに、フリーWi-Fiを使って電波で情報を飛ばして学校教育に活用する取り組みだ。そのあたりももっと膨らませていくべきだったかもしれない。

インドの視聴者の反応については、まとめているところだが、専用ホームページに動画を取りそろえた。過去のニューデリー支局のリポートも含

めて全て掲載し、インドに興味のある人がそのホームページに来ると、いろいろな情報が手に入るようになっている。アクセス状況も良く、このキャラバンを特集したページは、専用ホームページ全体の中で1位～2位のアクセス数を誇っている。

新興都市グルグラムからキャスターがリポートする演出も当初考えたが、最終的にはうまく見せられるものがみつからなかった。貴重な意見をいただいたと思う。

日本をどれぐらい意識したかに関しては、インドと日本の関わりがインド人の興味を引くのであれば、それは取り上げていきたいと思った。しかしそのためにほかの要素を抑制するようなことはせず、インド人に見てもらおうことと、世界の人にどうしたらインドの今を伝えられるのかについて、じっくり検討した。

(NHK側) タイトルに“Influential”を用いた意図について説明すると、世界の中でのインドの位置付けが今、大きく変わっていて、これまで自主自立の外交を貫いてきたインドをめぐって世界が注目している。その中で、それだけ影響力が大きくなっているインドをもっと詳しく見てみようと考えた。指摘のとおり、視聴者の期待に十分には応えきれなかった分については、今後の制作に活かしていきたい。

(NHK側) なぜ今のタイミングで放送したのかについては、毎年、可能ならターゲットとなる地域を決めて、集中取材をしたいと思っており、2017年度はインドネシアにキャスターが行って同じように集中的に放送をしたことがあった。その時にインドネシアはかなり日本に関心があることがわかった。インドは人口も多く、影響力も増えているので、これからいろいろとNHKワールド JAPANのプロモーションを行っていくために、インドにも入り込んで、どれぐらいの人に見てもらえるのか見極めていこうと考えた。その一方で、日本国内でのインドコミュニティーもとても大きいので、そこに対するアピールもできればと考えた。

(NHK側) 日本人の視点は最初から意識して、だからこそ日本との関わりは取り上げるべきだと考えた。だが、インドの人に興味を持ってもらうからには、何を見せればいいのかについて検討を重ねて、結果的にあの形に至った。3つ目は、バラバラの印象を与えたかもしれないが、日本とインドのつながりを、インドと日本と世界の人に見せるには、個別の事柄を拾っていくのがいいと考えていた。知られていない新しい話を伝えたいと考え、ボランティアに生涯を捧げる日本人の女性の話も、テレビでは初めて紹介した。そういった新しいものを探していった結果、多少テーマがバラバラな印象になってしまったのかもしれない。

(NHK側) どういう視点で番組を作るのかは、NHKの国際放送がどうあるべきかという、本質的な問題でもある。われわれはいつもそれを考えつつ制作を

している。NHKの国際放送の番組は受信料によって制作されており、基本的にはNHKに受信料を払っていただいている日本人たちのために資する番組でありたい。やはり番組によって日本をよりよく理解してもらうことが大事だ。日本人とはどういう人たちで、どういう価値観を持って、何を大事にして、どういうものの見方をしているのかを世界の人たちにおかっただくことを目指している。

例えば、今回の番組はインドを取材対象にしているが、インドの人たちも、「日本人たちはこういうふうにならぬ国を見るんだ」と理解する。あるいは、アメリカだったらアメリカの人たちは、「日本人はインドをこういうふうに見ているんだ」とわかっただくこともある。

英語を話す人たちが多いわりに、なかなかNHKの国際放送が浸透していないインドを今回取材したが、これからいろいろな意見が寄せられると思う。それを参考にしながらさらにインドへの浸透を図り、インドの人たちにもっと見てもらえる番組作りができるようにしていきたいと思っている。

- インド人にどういふ内容が関心をもたれるかを見る目が重要だとのことだが、それを聞いて思い出したのは、日本人に会うのは初めてだというインド人の大半が「おしん」は知っていることだ。インドでは「おしん」が爆発的な人気で、日本の経験から学びたい気持ちが民衆の中に高い。インドでは教育のある人でもゴミをポンポン捨て、衛生に対する意識が日本とはかなり異なっている。そういう中で、例えば日本が学校教育の中でも毎日掃除をしたり、ゴミの分別に非常に熱心だったり、衛生状況を高めるために日本社会の隅々までいろいろな仕組みがあることなども紹介すれば、インド人に関心を持っただくのではないかと思った。

< 「The Pianist from Syria」 (11月24日 (土) 10:10ほか) について >

- 大変感銘を受けた。非常にセンシティブなテーマで、現代的、まさにいま世界の中で大きな問題となっているシリア難民について、音楽を切り口に、しかも広島と結び付けている。1人のピアニストに焦点を当てて、政治的などころには深く入らずに、難民の置かれた状況や心の叫びにうまく焦点を当てたすばらしい番組だと感じた。
- 難民は世界的に大きな問題になっているが、このストーリーは難民の受け入れ国側の視点ではなく、難民自身の視点で描いたものである点で、非常に価値が高いのではないか。シリア難民の子どもたちが祖国での体験がトラウマになって自国の言葉を忘れてしまい、同時に祖国への愛情も失っていく様子がよく描かれていて、相当に危機的な状況を巧みに表現したものだ。

主人公の演奏活動やフリーレッスンにおいて祖国の歌を通じて祖国への愛が回復していくシーンは、本当に感動的だった。すばらしい番組だった。

ピアニスト自身の順風満帆ではない演奏活動の裏側の場面や、自信をなくしそうになったときに広島に行って、被爆現場や被爆ピアノを目にして勇気づけられていく姿

が捉えられていた。唯一の被爆国である日本の役割がうまく出ていたのではないと思う。

音楽が世界に与える力について主人公が語るシーンが最後にあるが、これも非常に有効だったと思う。ドイツ、あるいはヨーロッパ、アメリカなどで世界的に反難民、反移民感情が大きくなっているが、この内容であれば相当な人から共感を得られるのではないかと思った。

- これまで見てきた番組の中で1番だと思った。主人公は若く、30歳だが、同年代の若者と比べて目が全然違うと感じた。これだけすばらしい才能を持っていて、ピアノの腕前もすばらしくて、教育に対するモチベーションもあるが、それでも、若い人がこんなに悲しい目をするのが伝わっていた。多くの人に見てほしい。

この人物を取り上げたきっかけを教えてください。どこかの団体が演奏家として広島に招待したと理解したが、それがきっかけだったのか。というのは、私は広島の場面はないほうがよかったのではないかと思ったからだ。

広島も一般市民の多くが戦争で亡くなり、都市が破壊され、多くの人が傷ついた点はシリアと共通しているが、難民の一番の問題は祖国を追われてしまうことだ。追われた先の異国で住めと言われても言葉も通じない。理不尽なつらさがあると思ったので、もし日本に来るきっかけが広島でなかったのであれば、広島の場面はないほうがよくわかる番組だったのではないかと思った。

- (NHK側) 今回の番組を制作するきっかけは、主人公のピアニストのエイハム・アフマドさんが4月に東京と広島にコンサートで来日した時に、NHKの国内放送と国際放送のニュース企画で放送したことだ。

シリアの人々は広島や長崎の原爆を通じて日本のことを学校で学ぶようで、このエイハムさんもシリアにいた時から広島と長崎に興味を持ち、広島をめぐりたいと話していた。そこでエイハムさんの来日の様子を5月に国際放送のニュース番組で短い10分ほどの企画として放送した。

その後もディレクターはエイハムさんと直接英語でやり取りをして取材を重ねていき、最終的に今回の番組にした。

- この番組構成で、1人のピアニストの体験を超えるものを深く伝えることができているのではないかと思った。第三者にとって共時性であるとか、共感をおぼえることができるものであるとか、あるいは追体験ができることの中で、それが時には主人公のヒューマンストーリーそのものよりもはるかに重くなって伝わってきていると思う。

この番組でいい構成だと思った点が2つある。1つは、シリアで燃やされた主人公のピアノと、原爆を耐えた広島のピアノとの対比。もう1つは、主人公を含め、当初難民を率先して受け入れたドイツ社会と、右傾化し、反難民感情が高まったその後のドイツ社会。この2つは構成上、対比されていると理解している。ここは、視覚的に効果があったと思っている。非常にいい番組だ。

- 素直に感動した。難民を切り口にしてこれほど多くのいろいろな要素を提示してくれるのかと思った。いい映像だ。

子どもたちが歌っていてパンパンと銃声がある場面が番組の中で出ていた。その中で1人の子どもが亡くなってしまったとか、エイハムさんのご家族の様子とか、エイハムさんを取り巻く周辺の間人味を感じさせるところまで、番組への差し込み方が絶妙だった。心に残る感じに仕上がっていて、構成がとても上手だと感じた。

- とても感銘を受けた。特に難民暮らしが日々平たんな気持ちではいられないことがよく描かれていて、本当に日々の波乱の様子が伝わって来て胸が痛くなるようなところもあったが、それがとても心に残った。

共感しながら見ていたので、女の子がアラビア語を学びたくなると語る場面もうれしかった。同時に、日本がもっと難民を受け入れるとしたらどうなるのかと考えさせられた。

戦争を経験した国の人たちと話をする時、私が日本人だと言うと多くの場合、「広島と長崎なら俺たちも知っているよ。でも君たちは生き延びたんだよね、だから自分たちも希望を持てるんだ」と言われる。苦しみから立ち直る平和のシンボルのように思われている広島と長崎を、日本の私たちはどれほどきちんと理解しているのかについてふり返ることができる番組だったと思う。ぜひ日本の人たちにも見てもらいたい番組だ。

- 音楽は人を変える力があるというメッセージが全編を貫いていたように思う。まず音楽はこの主人公自身を非常に大きく変えている。次に子どもたちが大きく影響を受ける。それからその家族が影響を受ける。だから本人、子ども、家族を変える力が音楽にはある。一方で、変える力が及ばないと思われた、“Refugees go home”（難民は帰れ）と言っている人たちにどうやってこのメッセージを届けていくのか。音楽は何らかの力を発揮できるのか。これを日本語で放送したら、日本人を変える力があるかどうか。シリアへの理解をより深めることになるか。あるいは難民問題をより深く理解する番組となり得るか。そこに関心を持った。

もしドイツのテレビ局が同じような番組を作ったら、このようなものが作れただろうか。つまり“Refugees go home”というシーンを見せることができたかどうか。日本人が間に入ることによってドイツで起こっていることをより客観的によいところも悪いところも見せて、作れたのではないか。そういう意味では世界に届けるメッセージを非常にいい形で作り上げたのではないかと思う。

エイハムさんは有名な方かもしれないが、NHKがまず、こういう人を発見して、それをBBCやアメリカの番組が追っていくような、そういう流れができればおもしろいと思う。

- 本当にすばらしい番組だった。キーとなるポイントはいくつかあったと思うが、これから日本が難民問題を目の前の問題として考えていかなければならない時に、これを日本人が見て理解を深めていくことが大事だと思う。それから、番組で紹介していたドイツに亡命したファミリー、特に子どもの笑顔だ。笑顔であれだけ楽しそうにしている一方で、自国を否定していかなければならない。この2つのことを対比させることによって、視聴者に感動を与えることが必要だ。難民側の視点で作ったところが、感動させられた理由ではないか。

(NHK側) 日本人の視点で作るよりは、難民問題を普遍的に考えることができると取材した。これまでに作られたドキュメンタリーを見ても、ドイツ国内の制度的なところや難民がどういう状況に置かれて、どういう心理状況で暮らしているのかはなかなか見られなかった。長い時間をかけて難民の皆さんと直接話をして取材に応じていただいた。皆さん、今後自国に帰れないリスクもあり、テレビで何を言葉にして伝えたらいいのか考えながら取材に向き合っていた。本当に感謝している。そういった気持ちが伝わったのであれば、とてもありがたく思う。

(NHK側) この番組は11月27日、国内向けにBS1でも放送した。